

2019/05/12

「求めなさい」

「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありますでしょう。」(マタイ 7:7-11)

■選択はあなた次第

「求めなさい。そうすれば与えられます。」とは、「何を選択するかは、あなたが決めなさい。」ということです。人の心はドームのようなもので、自分以外は誰も立ち入ることができません。そして、その中に自分を動かすスイッチがいくつもあり、自分だけがそのスイッチを押すことができるのです。つまり、自分の将来を決めることができるのは、自分自身しかいないのです。

「自分で選択でき、自分しか選択できない」ということは、選択の責任は自分で負うということです。自分の人生は誰のせいにもできないのです。

アダムとエバは、罪という間違っただスイッチを押してしまった結果、自分達自身で死を背負わなければならなくなってしまうました。悪魔は二人に情報を提供しただけで、二人の代わりにスイッチを押したわけではありません。

私たちはうまくいかないことがあると「〇〇のせいだ」と言って、自分で責任を取らず、自分以外のところに責任があるかのように言い訳してしまいがちです。しかし、自分で選択できるということは、その選択には責任が伴うのです。しかし、それは自分の権利を放棄し、自分自身を放棄しているのと同じことです。「自分で決めることができる」という権利を放棄すると、人を責める生き方になってしまうのです。

■人の心の中

何かを選択するとき、私たちの心の中には様々な声が聞こえます。どの声に聞き従うか、よく考えて選択しなければなりません。

1. 人の声

多くの人は、人の声に聞き従って、何も考えず言われるままにスイッチを押します。なぜ

なら、人の期待に応えることで、人から評価されるからです。

2. 肉の声

快樂や金儲けなど、その時さえ良ければ構わない、見える安心を求めよというのが肉の声です。肉の声に従うと、自分では何も考えず、肉の欲求に流されるまま、肉を満足させるスイッチを押し続けてしまいます。肉の声に従うのも、人の声に聞き従うのも、自分で考えていないという点では同じです。

3. 魂の声

人間の魂は、神のいのちで造られていますから、魂の声とは神の声です。それは、この世界に関する疑問です。なぜ人は死ぬのか、死んだらどうなるのか、何のために生きているのか、自分は何者なのか…。なぜなら、神のいのちで造られている魂は、永遠・自由・無制約・善を知っているのに、この世界はまったく逆で、それらが無いからです。この世界では、愛したいと思っても愛せず、愛されるには条件をつけられ、永遠を求めてもありません。そこで、魂は疑問を持つのです。

自分自身を生きるということは、この魂の声に聞き従うことです。しかし、多くの人がこの声を見捨て、何も考えず、まず人の声、肉の声に聞き従ってしまうのです。どうすれば、魂の声に聞き従って、自分自身を生きることができるのでしょうか。

■自分とは何か

なぜ魂の声に聞き従うことが、自分自身を生きることになるのでしょうか。それは、「自分自身」とは、肉の体ではなく、いのちであり魂を指すものだからです。ですから、魂の声に聞き従って何かをする時、私たちは自分自身を生きることになるのです。反対に、魂の声を無視して生きる時、それは自分自身を放棄したことになります。

神は、「求める者たちに良いものを下さる」と言われます。それは、「求める者たちに聖霊を下さる」(ルカ 11:13) という意味です。神が与えてくださるのは、神ご自身です。つまり、神が「求めよ」と言っているのは神ご自身のことなのです。それが「魂の声」すなわち「神の声」に聞き従うことであり、この神との交わりによって、私たちは自分を生きることができるようになるのです。神を求めて生きることこそが、自分でものを考えるということなのです。

神は愛です。ですから、この地上で神を求めるとは、人を愛するということになります。

「それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。」(マタイ 7:12)

■神を求めるステップ

1. 考えること

神を求める第一ステップは、何のために生きているのか考えることです。考えることを放棄するのは、自分を放棄するのと同じです。私たちは、様々な出来事に出会い、様々な感情にぶつかります。大切なのは、否定的な感情を抱いた時、なぜつらいのか、なぜ不安なのか、自分の感情と向き合って考えることです。つらいことを人のせいにしてしまうのは、自分と向き合って考えることをしないからです。私たちは、これまで人の言われるままに生きてきたために、不愉快なことがあってもすべて人のせいにする癖がついています。しかし、本当はスイッチを押せるのは自分でしかありません。不安、つらさはそれを考える機会を私たちに与えてくれます。

2. 苦しむこと

イエス・キリストの生涯は苦しみの生涯でした。この世界は、私たちにとって苦しみの世界です。なぜなら、どんな楽しみも一時的であり、永遠に続く平安とはならないからです。それなのに、多くの人は苦しみを回避しようとして、苦しみ以外のものに目を向け、人の望みに応えることで幸せを得るかのように生きています。例えば、この世に妥協して不正に参加しようとする時、魂の声に聞き従うなら罪責感という苦しみと向き合わなければなりません。しかし、その苦しみを避けるために、人の期待に応えることで安心を得ようとしてしまうのです。

つまり、苦しむとは魂の声に聞き従うという意味です。私たちは魂の声を無視して、押したくないスイッチを押しています。しかし、苦しみと向き合うことで、自分を生きるというスイッチを押すことになるのです。

神と共に生きる人々は、皆苦しみを体験しています。良いことかわかっても実行できないという苦しみと向き合い、魂の声に聞き従って自分を生きることを選んだのです。イエス・キリストは十字架に架かる前に、「できればこの杯を取り除いてほしい」と苦しみも代える姿をお見せになりました。それは、苦しみから逃げずに向き合うことを教えるためです。

3. 絶望すること

苦しみと向き合うと私たちは「自分にはどうすることもできない」という現実にもぶつかります。人を愛したいと思っても愛せず、長生きしたくても永遠には生きられず、自分の理想とは異なる現実に、自分の無力さ弱さを認めるしかなくなるからです。これが絶望です。

しかし、どうすることもできなくなったその時こそ、私たちは「神様、助けてください」「神様にゆだねます」と告白することができるようになります。これが、初めて自分の意志で神を求めるスイッチを押す瞬間です。頑張ってもどうすることもできないという限界を知ると、神にゆだねることしかできないのです。

神が「求めなさい」と言われるのは、このスイッチのことです。それはとても小さなスイッチで、今まで光り輝くスイッチばかり手を伸ばしていた私たちは、気づくことはありませんでした。これが、聖書で言うところの「狭い門」です。これこそが、自分で選択するとい

うことになるのです。

「狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入って行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」(マタイ 7:13-14)

狭い門のスイッチは、この世界に絶望し初めて見つけることができるものです。聖書が、患難や苦しみに出会うことは幸いだと教えているのはそのためです。ですから、惑わされて自分を放棄するような生き方はやめて、神を求めるといふ本当の自分を取り戻すスイッチを押しましょう。

私たちは、神のいのちで造られており、キリストのからだの一部です。器官は体とつながらなければ生きることができません。自分を生きるとは、キリストのからだとして神と共に生きることです。それは神を信頼するということです。そのために必要なのが神にゆだねることです。

あなたの人生のスイッチは、あなたしか押すことができません。自分で考えて、自分の人生を大切に生きていきましょう。私たちは神と共に生きるという、本当の自分を取り戻して生きていきましょう。